

---

# 御魂に宿るものは終えず

御紋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

御魂に宿るものは終えず

### 【Nコード】

N0955Q

### 【作者名】

御紋

### 【あらすじ】

2010年8月1日の物語り。さあ、ゆっくりゆっくりこの道をおいで。私の歩みは止まっても、私の子供たちの歩みはまだ続いているのだから。      今でもおまえたちを愛しているよ。

おばあちゃん視点で原作半ばからその直後まで。

句読点のみをいじってサイトから転載。

サマ ウォーズ好きに捧げます。

【原作ネタばれOKの方推奨作品となります】

栄神格化主義者のサイト企画作品でした。

## 【 1 】（前書き）

こちらは筆者のサイトの企画で発生した作品を句読点をいじる程度の修正をしただけのものです。

【 1 】

おかしなものだと笑ってあげようか。  
けれど、たしかに覚悟はあったから。  
悔みはしないよ。

「皆で、ご飯を食べましょうか」

そう言ったのは私の長女。

女系一族だと言われる中で、私の跡を継ぐことを誰よりも意識していた。

泣きそうな表情になりながら、最後には成し遂げてくれる優しい子。

「大丈夫だ」と告げてあげれば笑みを浮かべた。

これからは自分で顔を上げていけるね？

「了平、ふぁいとー！」

「由美さん、こっちー！」

「あーん、まだ試合終わってないのに〜」  
ドタバタドタバタ。

ふふふ、駄目でしょう廊下は走っちゃいけません。

埃がたつでしょう？ ましてや、アナタ達は皆で食べるものを持っているのだから。

ああ、でもそうね。

もうこの声は届かないのね。

理香、直美、典子さん、由美さん、加奈さん。

私の大切な家族。

私の認めた女たち。

優しく強く、男たちを支えて子供たちを護ってくれるの  
でしょう？

「ばあちゃん、ただいま……」

ああ、お帰り。私の愛しい子供。

待っていたよ、待っていた。

いつか帰ってきてくれると。

この家がお前の還る場所だ。

私は、お前を生んであげることが出来なかったけれど。

間違えることなく、私はお前を育てた母だった。

いいかい、幸せな子。

お前は、二人の母を持つ、幸せな陣内家の一員であつたんだよ。  
いつか思い出して、お前の名は侘介。

人と家をつなぐ文字をその身を持つ者なのだから。

「大変じゃない！」

「ああ、追い詰められてる」

「食べてる場合なの！？」

「遺言だからな」

「敵は圧倒的なんでしょう！？」

「慶弔弐十年の大坂夏の陣じゃ徳川十五万の大軍勢に打って出た」

「でも、負けたんじゃない？」

「こういうのは勝ちそうだから戦うとか負けそうだから戦わないとかじゃないんだよ。負け戦だって戦うんだよ、ウチはな」

「馬鹿な家族！」

「そう、わたしたちはその子孫」

「たしかに、あたしもその馬鹿の一人だわ」

ふふふ。

可愛い子たち。

そうね。馬鹿かもしれないけど、私には愛しい子たちだよ？

だって、誰よりも真っ正直でまっすぐで

人を護ろう

と足掻き続けている。

それは間違いなく。

陣内家の人間である証だ。





【 2 】

「いけえええええ!!」

…叫んでいるのは誰だい？

「夏希っ、やれえええ!!」

頼彦？ 邦彦？ 克彦？

おやおや、懐かしいこと。おまえたちがそんなに必死に叫んでいるのは、…高校時代以来かい？

部活に忙しい割に私のもとへ顔を出してた子供たちが、いつのまにか親になって。

抱きしめる子供たちが愛しいのだと告げてきたのはいつのことだったか。

護っておいき。

それが、お前たちの家族だから。

「やっちまえ!!!」

…これ、はしたないよ。

女の子はもう少し上品な言葉をお使いって言っただろう？

理香、直美、万里子まで。

まったく、誰に似たんだかねえ。

若い頃に薙刀振りまわしてた私に似たんだったら、どうしようもないかね。

「先輩、いけます!」

「ぶちまかせっ!」

「うおおおおおおお!」

…おやま。

なんだい、何かしてたのかい？

おや、あれは花札じゃないか。      なんだい、皆して好きだねえ。

最近忙しくて花札の相手もしてもらえなかったんだ、あたしの相手も今度はしておくれよ？

何、急がなくていいよ、私の時間はゆっくりとあるんだから。  
生は有限、死は無限。

ゆっくりでいいから、生きてからおいで。

それが私の願いだ。



【 3 】

。

…わんわんわんわん。

おや、また途切れていた。

仕方ないかねえ、なにしろこんなことは初めてだ。

死んだなりの魂だ、まだまだ人生初めての経験って言うのはあるんだねえ。

まあ、死んだ後も人生なんていいはしないんだろうけども。

「ええっ！！！！？」

って、なんだい。

聞こえてたのかい？ 私の言葉。

ああ、違う。なんだか、みんな大きなTVを見てるよ。

よく分からないが、電子機器と魂っていうのは相性が悪いのかな。何が書いてあるのかとんとわかりやしないよ。

まあ、生きてても新しいものに追い付くのはそろそろ難しかったのが本音だね。

「ここにあらわしを落とす気？」

「それ以外の何がある！！！」

「ふざけんな、あの野郎お！」

「まだ解体は終わらないの？」

「やってる！」

【十分を切った！】

おや？ 知らない少年の声だ。

だが必死だね。

おまえさんも守ってくれてるんだねえ。なんてありがたいことだろう。

「もう任意のコース修正は無理だ」

「冷静に。まずは退避！ 近所の人たちに報せを！ どんな被害が出るかわからん！ 行くぞ！」

なんだろうね、避難だって。

裏山にあつた防空壕だったら、もう潰しちゃったよ？

いまどきの兵隊さんはそんなもんじゃ間に合わない武器を使うらしいからねえ。

… かたかたかたかた。

… おや？

なんだろう、二つの音が聞こえるよ。

… かたかたかた。

「佐久間！ 管理棟に奴のログは残ってる？」

【お、ああ】

… かたかたかたかた。

ぽたりと落ちる汗。

…何も言わずに仕事をするんだねえ。

避難に急ぐ子供たちを背後に、解体作業とやらをしてるらしい—  
人の子供を見た。

ふふふ。

やっぱり、お前も陣内家の人間なんだね。

もしも、いま肉体があつたなら。

お前の頭を撫でてあげようね。

他の子供たちにしてあげたように。

よく頑張ったねと声をかけてあげたいよ。

…いい子だね、侘介。

「まだ何かする気？」

「……」

ああ、聞こえない。

またかい、全くもって面倒なもんだ。

次は何で目覚めるのやら。

【 4 】

。

がたん。

墜ちた。

いや、痛くはないんだけど、  
もうちょっと丁寧に扱ってくれないかい？

口を酸っぱくして、御先祖さまは丁寧に扱うようになって教えたはずなんだがね。

「……」

がら…

「温泉だ」

「温泉だ」

「温泉がでたあああああ」

ん？

なんのことだろう？

と…。

……。

何があっただろう、これは。

我が家の敷地内から噴出しているあれは、どう見ても立派な温泉

だった。

…こんな日がくるとはねえ。

「あら……生きてる、わ」

万里子。

呆けた表情でいいなさんなよ、そんなに簡単に娘と再会してたま  
るかい。

「みんな、大丈夫か？」

「けがはしてねえか？」

万作、万助。

おやおや、いい年寄りが若者をかばったのかい？

なんともいい男に育ったもんだ、ウチの子は。

老けたも若いも関係なく、守れる男がいい男なのさ。ウチの家系  
はね。

「おーい、みんな大丈夫かー」

「じゃあ、おれ近所みてまわってくるわ」

「俺、仕事場行つて人手借りてくる……」

忙しないねえ、おまえたち。

体力自慢の若人は、さっさと仕事をしておくれ。

まあ、言われなくともしてるみたいだけでも。

ふふふ。



かたん…。

「…よかった、大丈夫だったか」  
ばあちゃん。

本当に、この子は…。

ええ、ええ。大丈夫でしたよ。

お前も大丈夫でよかった、侘介。

一番に、私に気付いてくれた子供。

「ばあちゃん！ 今助けるからな」

翔太。

もう『私』でなくなった方の身体を大事に考えてる思春期の孫を、  
どうすればいいものかと考える。

死んでしまったモノは、もう物にしかねない。

死者は、生者の輪から外される。

それが過去からの共通認識。

いつかわかるだろうか。

…いい嫁さんを探してくればいいんだが、

ふう。

「こら、いいかげんに戻っておいで」  
「「「はい」」」

爆風で散乱した我が家には、危険なモノが一杯散乱しているようだ。

壊れた障子や陶器の欠片。

素足で歩くのは危険だよ。

うろつろと歩き始めた子供たちを呼びもどしたのは直美だ。

…子供を得ることなく、離婚を選択した私の大事な家族。

泣きながら、痩せてしまった身体で「ごめんなさい」と言ってきた事を忘れない。

辛かったねえ。

「せめて、スリッパくらい履きなさい。ほら、行くよ」

皆の分も持つてくる！

「……はい……」

意外にも、直美は子供たちから好かれている。

先導する直美のあとを子供たちは素直について行った。

可愛い隊列なこと。くすくす。

「ふざっけんなー！　ウチの修理費は誰がだしてくれんのよー！！」

ぶるぶると震えながら電卓を探し出したのは、理香だ。

現実的？

まあ長女だから、しつかりしたもんだ。

その指先は怖ろしい早さで動いている。

…佳主馬のタイピングもかくやというところだろうか。

職業女性、というのは凄いもんだ。

「姉ちゃん、天災じゃないからなんとかなるさ」

持ち込んできたんだろ、仕事場の機器類の様子を確かめていた理一が笑顔で言った。

おまえは、誰に似たのかねえ。

笑顔の裏で、あてのある先に押し付けようとかたくらんでいそうな本家の長男がすごく不思議だった。

うーん、似てるのはあの人よりもその弟だね。

県議会に勤めるまでいった彼も、あんな笑顔でいろいろとしてくれた。

そう、いろいろと。

笑顔が彼の自己防衛なんだろうと理解できたのは嫁いで何年たつてからだっただか。

笑顔の下で苦しんでるとき、手を差し伸べてくれる女性が出るのを待っているよ。



【 5 】

「健二さん！」

「健二くん！」

おや？

一人だけ、まだ目覚めてない子がいるようだ。

「あらあら。 どうしたのかしら」

「ふむ、ちよつと診てみるか」  
よいしょ。

万作が腰を上げて、健二さんの様子をうかがい始めた。  
脈をとって、眼を見て、手足をさすって、表情を見て。  
「ふむ、なんともない」

脳しんとうというよりは疲労だな。 疲れてたんだろう。

「……。 あれだけすごいことしてくれたんです。 休ませてあげるの  
が一番ですよ」

ヒーロー、ですからねえ。

万作と太助だった。

よく寝てる。

鼻血はだれかが拭ってあげたようだ。

焦った表情で夏希と佳主馬がその身体をゆするうとしていたのを、

万作が止めていた。

【みなさん、大丈夫ですかー】

聞き慣れない少年の声が、皆に声をかけていた。

「ああ、大丈夫だったよ、おかげさまでね」

佐久間くんにも本当にお世話になったねえ。

太助が、大きな画面から話しかけてきた少年へ返答していた。

【健二は電池切れましたか。脳内あんだけ一気につかえねえ  
】  
仕方ない仕方がない。

よくあることだというように、言葉を繋げる少年の声には安堵が  
潜んでいた。

【とりあえず。しばらくOZ関連のほうは俺が様子みてますよ  
御希望なら、使いつぱしますよ？】

「今のところは特にないかなあ」  
残っている男たちに視線で了解を得てから、太助が答えていた。

【了解です！】

「佐久間くん、キミも寝ていいんだよ？」

ここのところ、ろくに寝れてないだろう？  
協力してくれた少年の身体が少し揺れている。

【若いから、大丈夫ですよ！】

「それをいわれると……」  
苦笑いする太助。

「若さを過信しないで。                      落ち着いてからでもいいから、食事を摂って休みなさい」

今は興奮して寝付けないのも分かるがね。  
理一は、そう諭した。

【…はい】

今度は少年が苦笑いする番だ。

ぱたぱた。

「                      離れの方がまだ綺麗よ。お布団敷いたから、連れてきてあげてくれる？」

聖美の声に男たちは腰を上げる。

失神したままの、我が家のヒーローどのを休ませるために。

ありがとうねえ。

小磯健二。

夏希が連れてきた、偽の婚約者。

- - -

僕は…、まだ駄目なんです。

自信なさげに呟いた少年。

大丈夫、大丈夫。

まだまだ未来は残っている。

足掻く少年にはまだわからない。

一つ一つこなすことでしか得られないものがあるのだと。

あきらめたら終わりなんです。

そう語った少年の声を、魂のまどろみの中で聞いた。  
それを知っているおまえさんなら、大丈夫だ。

健二さんなら出来るよ。

言っただろう、おまえさんは立派な陣内家の新しい家族だって。





【 6 】

「かあさん、お葬式！」  
「どうしよう!!」

「ああ、…もういいわ」

野外でしましょう。

晴れ渡る空を眺めながら、万里子が言った。

「は…。」　　そうね、そうしちゃうか」  
あっけにとられた後で理香が笑い。

「……つく」  
理一が引きつけるように笑って。

「よし、じゃあ俺はイカ焼くか！」

「……バーベキューでもしますか」  
万助はにかつと笑い、太助は父親の行動にただそう述べた。

「了平兄ちゃん、勝ったよー」

「勝った」

「優勝したよー」

報告してきた子供らの声。

遠くで喜ぶ由美さんの声が聞こえた。

ああ、頑張ったね。了平。

誕生日には優勝旗を持って帰ると言ってくれた曾孫の一人を思う。

泣くだろうけど。

いまだに私の死を知らされていないあの子は。

感情がすぐに顔に出る了平。

今でも待っているよ、優勝旗。

お誕生日にプレゼントするんだ！

そう言ってくれたあの子に。

頑張ったね、と誰かに代わりに伝えてほしい。

きっと、それは誰もがいうのだろうけれど。

おかえり、それからおめでとう。

「よし、よくやった！！」

「やるねえ」

にこにこ笑顔でみなが笑っていた。

「じゃあ、行ってくるわ」

県警まで。

そう言った後、侘介は出ていった。

「翔太、連れてけ」

おまえの職場だろうが。

一本だけ連絡をいれたあと、がたがたの車に乗っていった。

… 行つてらっしゃい。

今度は、早く戻つておいでよ？

夏の日差しが熱いのか。

みな汗をかいていた。

私はそんなことはないがねえ。  
なにしろ、魂だけの存在だ。

見える風景はとても美しかったよ。  
すべてが。

愛しい、私の夏。

。



【 7 】

はっぴバースデー、トウ、ユウ。

「「「「「 90歳のお誕生日おめでとう、おばあちゃん!!」

「「「

私の両隣りには、世話をしていたアサガオの鉢植え。  
綺麗に今年も咲いてくれて何よりだ。

呆然と見守る参列者には申し訳ないが。  
私は幸せだよ。

涙の葬式より、笑顔の誕生日の方がいい。

「さあ、食べ食べ!」

いい色に焼けたイカ。

食べたいね。

歯が立たなくなっ食べれなくなっ、どれだけたってたと思っ  
んだい?

食への関心はそれなりにあるんだよ。

豪快に泣いているのは、報せを聞いてすぐに帰ってきた了平かい。  
ありがとう、約束通り持ち帰ってきてくれたんだね。優勝旗。

仲間たちより先に帰ってきたんだろう、ユニフォームのままのひ孫にお礼を言った。

「う、動いた！」

聖美のお腹に手を当てて、ビックリしているのは佳主馬。  
本当に、あれは命の神秘だよ。

自分の中に一つの命がいることを不思議に思ったものだ。

いいお兄ちゃんになっておあげ。

きつと、なってくれるだろうけど。

さあ、いいかげんに少し休もうか。  
私を置いて先に逝ってしまった、困った夫が迎えに来るのを此処で待とう。

私が生きた、この家で。

了 by 御紋

人が亡くなったあと、魂は何処にあるのかそんなことはここで  
詮議する気はありません。

遺影に宿ったおばあちゃんの魂は、ただいまお休み期間。

49日には新しい旅路を辿るでしょう。

あるいは魂は分解されて世界へ循環するという説もありますが。

最後に、笑顔であつた遺影に救われました。

私なりのおばあちゃん視点での物語りはいかがでしたでしょうか。  
皆様のなかのおばあちゃんに相似するところがありましたら幸いです。  
です。

捏造視点の物語りへのお付き合い、ありがとうございました。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0955q/>

---

御魂に宿るものは终えず

2011年1月16日11時55分発行